

菊池寛「三浦右衛門の最後」試論

金 宙賢

はじめに

「三浦右衛門の最後」^①は、大正五年十一月の第四次『新思潮』に載せられた短編小説で菊池寛の最も早い時期の歴史小説である。戦国時代今川家の臣下であった三浦右衛門の悲惨な最後を書いたこの小説の結末には「戦国時代の文献を読むと攻城野戦英雄雲の如く、十八貫の鉄の棒を亭殻の如く振り廻す勇士や、敵将の首を引き抜く豪傑は沢山居るが、人間らしい人間を常に miss して居た。自分は浅井了意の犬張子を読んで三浦右衛門の最後を知った時初めて「There is also a man」の感に堪へなかつた」と述べられている。この最後のコメントから、この小説はヒューマニズムをテーマとして書いた小説であると評価され、その典拠

も浅井了意の『狗張子』であるとされてきた。この作品に関する先行研究は数少ないが、全集や単行本の解説などで菊池の歴史物を論じる際には必ずこの作品が紹介され、最後の「There is also a man」を引きながら、菊池のヒューマニスト的な面を指摘するものが多い。

たとえば、和田繁二郎は「芥川と菊池寛の歴史小説」(『国文学』昭和二十八年二月)において、芥川と菊池の歴史小説を比較しながら「これらの菊池の歴史小説は芥川のものと同じく、ヒューマンなものの探求と提示という点で共通したものがあり、新しく人間像の発掘を試みたもので画期的な業績と言わねばならない」と述べ、「菊池の場合、啓吉物などには、虚無感あるいは厭世的な傾きが見られるのであるが、この歴史小説の類にはほとんどそれを見ることが出

来ない。もっぱら人間性礼賛が前面に押し出されている」と評価している。

このような「人間性礼賛」といった見解は、小林秀雄の「解説」『菊池寛文学全集二』（昭和三十五年、文藝春秋新社）にも見られる。小林は「菊池は、大正八年十月、『文章世界』に「小説の分類」という文章を書いた事がある。そこで菊池は、アメリカの作家のアッシュマンの小説分類法を紹介したのだが、その中の一つが「人間の興味ヒューマンインテレストの小説」であった」と述べながら「ヒューマンインテレストの小説」という表現を取り上げ、菊池の小説こそそれであったとする。「菊池寛の作品の製作動機はいつもそこにある。其処以外にはなかったと言ってもよい。この集（引用者注：『菊池寛文学全集二』）のなかには、自己の生活を題材とした幾つかの作もあるが、どれも告白文学として工夫を凝らされたものではない。悔恨も弁明も主張もない。自己の平凡な生活が平凡に語られていて、作者はおそらくこれを読むものに、「ここにも人間がいる」と共感してくれる人間がいたら満足だ、それ以上何も望んではない、と考えていたと思われる」と述べているのである。

小林の言う「ここにも人間がいる」とは言うまでもなく「三浦右衛門の最後」の末尾の表現を意識したものである

う。このように「三浦右衛門の最後」を菊池のヒューマニズムを示す小説と見る和田や小林の評価はその後もずっと維持され、作品の典拠についても、作中で菊池が言及した「犬張子」（『狗張子』）であると疑いなく受け入れられてきた感がある。確かに、この作品は『狗張子』を典拠として、武士道の世界では見ることのできなかった自分の命を惜しむ人間的な武士を描いたヒューマニズムの小説としても読むことができる。しかし、『狗張子』と比べてみると、設定や内容において異なる部分も少なくない。ストーリーは類似しているので題材となったのは確かであろうが、細部に至っては全く異なるのである。しかしながら、この作品は「ヒューマニズムの小説」として単純に評価され、典拠に関してもまた作品の解釈に対しても今まであまり詳しくは研究されてこなかった。

ここでは、作者が自ら典拠として明示している『狗張子』とこの小説との比較を通してその異同を明らかにし、隠れた典拠の可能性を探りたい。そして三浦右衛門という主人公の造形や語りの方にも着目し、菊池の歴史小説の書き方の原点を示している小説として考察してみたいと思う。

一 「三浦右衛門の最後」と浅井了意『狗張子』

まず『狗張子』について見てみよう。『狗張子』とは江戸前期に書かれた浅井了意の仮名草子で、作者没後である元禄五年（一六九二）に刊行された。全七卷であるが、内容は中国唐代の短篇怪異小説を翻案したもの、本朝の先行作品を素材としたものなど四五編の怪奇説話から成っている。

『狗張子』の翻刻は「近代日本文学大系」第十三卷『怪異小説集・全』（昭和三年五月、国民図書株式会社編）、「日本名著全集」第十卷『怪談名作集』（昭和三年、日本名著全集刊行会）、『徳川文芸類聚』（大正四年七月、国書刊行会）の三種類である。³菊池が具体的にどのような経緯でこの『狗張子』を読んだのかは明らかではないが、執筆時期を考えると恐らく『徳川文芸類聚』の第四卷に収録された「狗張子」を読んだ可能性が高いと思われる。⁴したがって、作品の末にある「犬張子」とは『徳川文芸類聚』「狗張子」の中の巻五の「今川氏真没落 附 三浦右衛門最後」を指していると思われる。

「狗張子」の「今川氏真没落 附 三浦右衛門最後」とはどのような内容であるのか。周知の通り、天文七年（一五三八）今川義元の子として生まれた氏真は、永禄三年（一

五六〇）父の義元が桶狭間の戦いで織田信長によって討たれ、家督を相続した。しかし氏真にとって、父の死んだ桶狭間の敗戦の打撃は大きく、勢を立て直すことはできなかつた。わずか七年足らずで武田信玄と徳川家康の侵攻を受け、領国の駿河・遠海・三河を奪われ、戦国大名としての今川氏は滅亡するに至ったのである。

「狗張子」もこれに従っており、話は「駿府の今川義元」が織田信長公に討たれ、その子息氏真そのあとをつぎ（傍点は筆者による。以下同様）というところから話が始まる。その後、武藤新三郎という「白面の佞幸」が今川氏真に寵愛され、やがて三浦右衛門佐を名乗り権力を握るようになるのだが、「氏真限りなく愛まどひて、日夜席を同して、酒宴遊興に月をわたり、亂舞淫楽に年を送」ったので、その莫大な浪費のため百姓の生活は疲弊し、国政は破綻してしまふ。百姓は当然のことながら三浦右衛門を恨む。その後、三浦右衛門は戦争で劣勢になった氏真を裏切つて一人で逃げる。三浦右衛門は三河の高天神に行き、小笠原与八郎に「叢のこつくなる涙を雨の如に流し」ながら「たとひ耳鼻をそがれてなりとも、命をだにたすけられなば、限りなき御恩なるべし」と助けを求め、今川家の没落を聞いた小笠原は三浦右衛門に「あのきたなき根性故にこそ、重恩

の主をすて、これまでは落ち来りけれ。とくく首をはねて、不忠不義の佞臣のこらしめにせよや」と言い、三浦右衛門の首を斬る。そしてその死骸は野辺に捨てられるが「鳶鳥あつまり、眼をつかみはらわた啄ばみ、犬狼むらがりて、手足を引きちらししむらをあらそふ」というのが結末である。最後は「一旦に果報盡て、屍を草むらにさらし、恥を残すこそ哀なれ」とある。

一方、菊池の「三浦右衛門の最後」は、泥だらけの落人の三浦右衛門が高天神を訪ねる場面から始まる。豪奢遊蕩の中心であり、義元恩顧の忠臣を続々に退転させた原因であると噂されていた三浦右衛門は、今川氏・元の寵愛を受けていた。しかし、今川家が戦争で敗れると三浦右衛門は自身の命の危機を感じ、君主の氏元を捨てて逃げてしまう。その後、彼はかつて自分が懇意にしていた天野刑部を頼って、高天神の城へと向かうが、当初歓迎してくれた刑部は氏元が負けたことを知り、氏元の敵であった織田勢に忠誠心を示すために、三浦右衛門を殺そうとする。右衛門は形部に命乞いをするが、形部とその部下たちは、命を惜しむ三浦右衛門を弄び、鼻と両耳、足や腕を次々と斬り、三浦右衛門は死んでしまう。「太刀取は四度太刀を振り直してえいと首を刎ねた。首は砂の上を二、三尺ころく」と転げ

て、止まった所で口をモグくさせた。肺臓と離れて居なかつたらキット「命が惜しうム」と云つたに違ひない」と、最後まで命を惜しんだ三浦右衛門だが、このあとの「There is also a man」のコメントで作品は閉じられているのである。

設定だけを比較してみると「狗張子」では、主君は今川義元の息子である「今川氏真」であり、永禄十年十二月六日「武田信玄三万五千余騎にて、駿府にをしよせける」とある。そして三浦右衛門は高天神の「小笠原与八郎」に助けを求める。しかし「三浦右衛門の最後」になると、今川義元の息子である主君は名前が「今川氏元」であり、三浦右衛門が高天神の「天野刑部」を訪ねるのは「天正の末年で酷い盛夏の一日」となっている。「狗張子」にも実名で登場していた「今川氏真」は何故か架空の人物の「今川氏元」になっており、「小笠原与八郎」は「天野刑部」という名前に変えられている。「天正末年」は、文禄元年（二五九二年）になるのであるが、歴史上、今川家が府中の城を攻められたのは永禄十一年（二五六八）であり、「狗張子」の「永禄十年十二月六日」が史実通りである。「狗張子」の人名や年号が史実と一致しているにもかかわらず、菊池はそれをわざわざ変更したことが分かる。しかも、初出である『新

思潮』の「三浦右衛門の最期」では「今川氏元」で登場していた氏真は、初刊本の『無名作家の日記』（大正七年「新進作家叢書 十五」新潮社）の本文では、なぜか「今川氏康」という名前で登場する。その後の全集にはまた初出に基づき「今川氏元」に戻っている。

しかも「狗張子」では「白面の佞幸」として簡略に済まされている三浦右衛門の外見は「三浦右衛門の最後」では数ヶ所にわたってその美貌が鮮やかに描写されており、それゆえ「今川氏元」との同性愛的な関係をはのめかしている点も「狗張子」では見られない相違点である。このような人物造形はどこに由来するのだろうか。

二 隠された典拠の可能性

—「狗張子」と『甲陽軍鑑』—

菊池は「犬張子イヌカウを読んで、三浦右衛門の最後を知った時、初めて「There is also a man」の感に堪へなかつた」と書いているが、今川家の敗退と三浦右衛門の話は、実は「狗張子」だけではなく、軍鑑物などですでに広く知られていた。例えば「狗張子」の典拠の一つとしても知られている『甲陽軍鑑』は、全三十一巻五十九品から成る軍学書であるが、武田信玄を中心とする甲州武士の事績・心構え・理想を述

べたもので、国書総目録によると『甲陽軍鑑』の現存する最古の板本は明暦二年版（一六五六）であり、万治二年版（一六五九）と刊年不明の版本がある。そして江戸時代だけでも二十種に近い板本が出ており、写本で伝えられたものも数多い。

近代に入ってからからの翻刻を見ると、明暦二年版本の翻刻が『戦国資料叢書』の第三巻五編（昭和四十一年、人物往来社、中村孝也等監修）に、万治二年版本系統が『甲陽叢書第一、二篇甲陽軍鑑』（明治二十五～二十六年、温故堂、高坂弾正著、山田弘道校）、『甲斐叢書四・五』（昭和九年、甲斐叢書刊行会、広瀬広一・赤岡重樹校）、『武田流軍学全書』（昭和十年、武田流軍学全書刊行会）、『甲斐志料集成九』（昭和七年、甲斐志料刊行会）と様々に刊行されている。

菊池が『甲陽軍鑑』を読んだとするなら時期的にも関連性においても『甲陽叢書第二篇甲陽軍鑑』収録のもの可能性が高い。まず「甲陽軍鑑品第三十四 巻第十一之上」を見てみよう。引用はすべて『甲陽叢書第二編甲陽軍鑑』（明治二十五年、温故堂）による。

容貌美麗にばかりあれば西国の大内義隆が風のごとく
に成候 遠からぬ駿河氏真の家老武藤新三郎行儀、香車

過候て今川の家に武士道手柄者共数多ありと雖も父義元の吊合戦ならずして申の年より當年迄九年の間香車風流の沙汰斗り候て武士の道すたりたる様にみゆるは武藤新三郎が氏真の氣に入、三浦右衛門助に成り、心は貪、上は香車にけたかく仕るとて諸侍におほへい致し諸人にかれ候事香車過たる故也

大内義隆は衆道を好んだ事でも知られている人物だが、ここでは氏真の三浦右衛門に対する寵愛を大内に喩えているため、氏真と三浦右衛門の同性愛的な関係も覗える。「狗張子」にはなかった「容貌美麗」の三浦右衛門や「大内義隆が風のごとく」といったホモセクシユアルな設定が『甲陽叢書第二編甲陽軍鑑』では示されている。容貌美麗の武藤新三郎は氏真から寵愛され三浦右衛門という名を与えられたのであるが、武藤新三郎は身分の低い出身であったらしい。何故彼が三浦の名字をもらったのかについては、また『三河後風土記…今古実録』（明治十九年、大村弼八郎編、栄泉社）「三浦義鎮倭弁を以て氏真を惑はす事」の「卷之三」にも書かれている。氏真はある日「一人の美童を見て頻りに恋慕ひ」「近臣を呼び彼は何者の倅なるや」と聞いたところ「料理人武藤喜兵衛という者の倅にて弥三郎という者」

であることが分かった。氏真は、低い身分に懸念を抱き、「小原肥前守と談合」して「彼を妾腹の男子」とさせた。その後「弥三郎を呼出して近習に召仕」させたが「今川家十八人の大身の内三浦何某早世して其家断絶せんとしけるを氏真彼寵愛深き弥三郎に三浦家を相続させて三浦右衛門尉義鎮と名乗せ」たと述べられている。「狗張子」にはない三浦右衛門の造形は『甲陽叢書第二編甲陽軍鑑』と『三河後風土記…今古実録』に共通しているのである。

同『甲陽叢書第二編甲陽軍鑑』の「甲陽軍鑑命期卷品第十一 卷第三 鈍過たる大将の事 付 駿州今川家 山本勘介の事」には氏真が「三浦右衛門といふ愚者の申すままに成り給ひ三浦右衛門が身よりの者或は三浦右衛門が氣にあふたる者ばかり仕合せよく左様なる仕置き故」とあって、「鈍過たる大将」である氏真は三浦右衛門に氣持ちを奪われてしまい、彼の言うがままになっていたという設定である。

また『日本史蹟文庫 戦国の川中島⁵⁾』にも「この時今川氏の主は氏真であったが、氏真は性格暗愚に且つ疍弱と来て、政務、武事共に之を顧みることなく総べてその嬖臣の三浦右衛門佐義鎮と云ふものに任せて居た。義鎮は却々喰へぬ男で、その政治向きにえこひいきの事多く偏頗の所置

のみやったので国人服せず今川家の家運は漸次衰微に傾き
凋古惨凄なる秋野の趣きを呈するに至った」とある。三浦
右衛門については「残酷な佞人ゆえ」「今川家の人々心あ
しくなり、そでなき事に物をいれ、堺の紹鷗が流の茶の湯
がかりなりとて茶碗一ツを三千貫にて買取栄花にふけり申
候は三浦右衛門のしわざなり」とあるくらいであるが、こ
れは「狗張子」の「和泉の境に聞えし紹鷗がもちたる高麗
茶碗を三千貫に買とり」という記述とも通底する部分であ
ろう。三浦右衛門の最後については「三浦右衛門が累年佞
人ゆへ悉く氏真公をうらみ奉り供仕する者すくなし結句氏
真公世が世の時は威勢なき人々に供いたす者あまたあり一
番にいせい者の三浦右衛門はづして遠州高天神の小笠原を
頼みて行に冥加盡はて三浦右衛門小笠原に誅せらる」とな
っているので、三浦右衛門が高天神の小笠原を訪ねてそこ
で成敗された事がわかる。

今川家と三浦右衛門の話伝える書物は数多いのである
が、菊池が作中で言及した「犬張子」「狗張子」以外の物
も紹介したのは、菊池がすでにこの話を知っていた可能性
が高いからである。歴史好きで博覧強記の菊池はこの話自
体は知っていたが、いずれも三浦右衛門の最後については
詳しく書かれていなかったため、その最後の詳細を知り、

創作のヒントを得たのは「狗張子」を読んでからではない
かと考えられる。というのは、他の本には三浦右衛門が最
後死んだ事だけを伝えているが、唯一「狗張子」だけが怪
談を集めたものであるということもあって、懸命に命を乞
う三浦右衛門の心境と、その悲惨な首切りの場面、そして
野原に捨てられた遺体の凄まじい姿までをもグロテスクに
描いているからである。菊池は『甲陽叢書第二篇甲陽軍鑑』
等からすでに三浦右衛門の話を知っており、氏真との関係
や三浦右衛門の外見においてはそれに従ったのだが、その
最後の首切りの場面は浅井了意の「狗張子」の場面を参考
にしたものと考えられる。さらに、菊池の作り出した三浦
右衛門という人物の外見描写においては、歌舞伎の女形の
造形を参考にしたものと考えられるのである。

三 三浦右衛門の造形と

「There is also a man」の意味

すでに見てきたように「狗張子」を含め、諸書では三浦
右衛門を悪の根源のように描いている。では、小説ではど
うなのか。三浦右衛門について語っている部分を見てみよ
う。

彼は今川家のカンカア⁽⁶⁾だと云はれて居る。氏元が豪奢遊蕩の中心は彼だと云はれて居る。義元の時よりは二、三倍の誅求があるのも、皆彼の為だと云はれて居る。義元恩顧の忠臣が続々と退転したのも彼の為だと云はれて居る。今川家の心ある人々は彼の名を呪つて居る。彼の悪評は駿河一国の隅々に迄響いて居る。其の悪評を耳にしないのは恐らく彼自身丈であつたかも知れない。実際、右衛門には何の罪もないのだが、右衛門の寵幸と今川家の頹廢とが同時に起つたので、単純な世人は其間に因果関係があると思つたのである。実際彼は一人の無邪気な少年に過ぎない。彼は十三の時に、京の西洞院に侘住居をして居た両親の手から今川家へ児小姓に召し上げられたので、其以來は、ただ主君や周囲からせられる事を受動的に甘受して居た丈で自分の意志を働かしては、何一つした事もないが、氏元の彼に対する寵幸があまりに極端なので、彼が巧みに主君を操つて居るやうに見えた丈である。

作中の語り手の表現を借りると、三浦右衛門は「無邪気な少年」であつて、彼の悪名は「単純な世人」の「誤解」であり「彼が巧みに主君を操つて居るやうに見えた丈であ

る」と三浦右衛門を擁護するように語っている。三浦右衛門は「主君や周囲からせられることを受動的に甘受して居た丈で自分の意志を働かしては、何一つした事もない」のであつた。

このように、三浦右衛門の無邪気さを強調する語り手は、彼の外見においてもかなり詳しい描写を加えている。三浦右衛門は「前髪を二つに分けた下から美しい眸が光っている」「男らしさの裡に女らしさがあり」「彼の美しい肉体は六月の太陽の下に忽ち色が変わつて行くほど白かつた」などと描写されるのだが、このような中性的または女性的ともいえる美少年としての具体的かつ繊細な描写は、前述した『甲陽叢書第二編甲陽軍鑑』には「容貌美麗」、『三河後風土記・今古実録』の卷之三には「一人の美童」と描かれているのみで、このような三浦右衛門のホモセクシユアルな魅力や中性的美少年の姿は、少なくとも「狗張子」では直接には描かれていない部分である。「前髪を二つに分けた白い肌」の、「女らしさのある美少年」という三浦右衛門の人物像はどこか歌舞伎の若衆を思わせるのだが、これ以外にも本作には「鈴ヶ森の舞台で権八に切られた雲助の手のように」という表現が存在することから、菊池が歌舞伎の若衆を念頭において三浦右衛門を描いたことは、ほぼ確

実であると思われるのである。

「鈴ヶ森」とは、江戸時代に武蔵国荏原郡の東海道筋の鈴ヶ森に置かれていた刑場の呼称でもあるが、ここでは歌舞伎の脚本を指している。一幕物で浄瑠璃「驪山比翼塚」に初めて現われる「鈴ヶ森」は、四世鶴屋南北作の歌舞伎劇「靈験會我籬」を経て「浮世柄比翼稲妻」に至って確立した「鈴ヶ森の場」を独立させた作品である。浪人白井権八が大勢の雲助との立ち回りの後、幡随院長兵衛と出会う場面などが有名だが、この歌舞伎の比喩が重要なのは、それが本作中の三浦右衛門の造形とつながるからである。この歌舞伎の主人公である白井権八は、江戸時代前期の武士の平井権八をモデルにしたと言われるが、彼は延宝七年に二十五歳で鈴ヶ森で処刑され、歌舞伎、浄瑠璃では白井権八の名で知られる。三浦右衛門を描く際に、美貌の若衆である歌舞伎の白井権八の姿を菊池は大いに参考したのではないかと思われる。

実際、作品の発表の直前である大正五年七月号の『演芸画報』には「厚見老人」という筆名で書かれた「権八のいろいろ」という記事が載っており、舞台化されてきた権八について説明されている。その中では権八について「伶俐で武芸が出来て、そして美しい」「水を滴れる様な美しい

若衆」であるとして歌舞伎や狂言に登場する権八の美貌を褒め、権八の役が女形として上演されるのもおかしくないとしている。

さて、作中で三浦右衛門は誤解された無実の美しい少年のように語られているのだが、はたして三浦右衛門は本当に「無邪気な美少年」であったのだろうか。語り手は「狗張子」には表れていない三浦右衛門の美しさまでを加え、彼の無実を抗弁しているように思われるのだが、他の三浦右衛門の描写を見ると必ずしもそうではない事が分かる。「男らしさの裡に女らしさがあり、凛々しさの裡に狡猾らしさがあった」とあって、三浦右衛門は「男らしさ」と「女らしさ」、「凛々しさ」と「狡猾らしさ」を同時に持っている、つまり実体を掴みにくい存在として書かれている。言い換えると、彼は対照的な二つの面を持っているのであって、単に無実の純粋な少年としては説明しきれない裏面をも合わせて持っているといえよう。

作中では、三浦右衛門の存在は今川家の滅亡とは直接関係していないと語られているが、彼の「狡猾らしさ」を考えると、この発言はどうも疑わしく思われる。「氏元が豪奢遊蕩の中心」である、あるいは「今川家のカンカア」であるという彼に対する「噂」は、必ずしも誤解ではなかつ

たのではないだろうか。三浦右衛門の悪名を、語り手は「単純な世人」の因果関係の間違いであると弁護しているのだが、実際には事実であった可能性が高いのである。しかも、三浦右衛門が高天神を訪ね刑部に会う場面を見ると、彼は自分の服装が粗末である理由や一人で高天神を訪ねた訳などを語る際に刑部に嘘をついている。「右衛門も普通の人間が吐く位の偽はつくことが出来た」ために、「彼は乱軍の中で主人と別れ〜になった不幸を初とし、世を忍ぶため」に物具を自分で捨てた話などを、言葉巧みにした」のであるという。三浦右衛門は、無邪気な美少年というよりは、

自分が助かるためなら「普通の人間が吐くぐらいの偽」の出来る言葉の巧みな人間なのである。これは「実際彼は一の無邪気な少年に過ぎない」という文言と明らかに相反している。この作品は、表面的には命を惜しんだ純粋な美少年の悲惨な結末を描いた話のように読めるのだが、三浦右衛門は単に「無邪気な美少年」というよりは裏面のある多面的な人物として造形されているとみるべきなのである。

このような三浦右衛門の人物造形を踏まえた上で、この小説の「There is also a man」という文言の持つ意味を考え直してみよう。作品の最後に作者は「自分は、浅井了意

の犬張子を読んで三浦右衛門の最後を知った時初めて「There is also a man」の感に堪へなかつた」と述べているので、命をいかに軽く捨てるかを工夫していた時代に、死にたくないと最後まで叫んだ三浦右衛門の「人間的な姿」を「There is also a man」と述べているように読むことができる。しかし、このような二重性を持つている主人公の人物造形を合わせ考えると、「There is also a man」の持つ異なる意味が見えてくるのではないか。冒頭に登場する子供の描写を見てもみよう。

素裸体の子供が、五六人も集ってガヤ〜云つて居る。夫は草を毘にして居る小動物は釣つて居るのである。不気味な朱色をして居る小さい動物は幾つも溝の中から釣り上げられては土の上に投げ付けられて居る。投げ付けられる度に、身体をもがく勢いが弱くなつて、終ひにどんなに強く投げつけられてもビクともしなくなる。するとまた新しい草を引きぬいて新しい毘をこさへる。子供の群の前後には、赤い腹を白い灰のやうな土の中に横へえた醜い小動物の死骸が幾つも〜もころがつて居る。

このように、何気なくいたずらでイモリを釣つては投げ

つける子供の遊びの場面は、最後の三浦右衛門の首切りの場面と呼応する。遊びとして「小さい動物」を殺す子供たちは、命を大事にするという自覚もなく、また自分より小さい弱者を苦しめ、殺すのを遊びとして楽しんでいようである。合わせて、刑部と三浦右衛門の最後の場面も引いておきたい。

彼等は一斉に笑った。刑部はまた嘲笑つて見たくなくなつた。「右衛門！命は惜しいか。惜しければ手を突いて、惜しいと申せ」と云つた。皆はまさか武士ともあるべきものが之ほど侮辱を受けてまで命乞ひをすまいと思つた。然し夫は思つた者の誤解である。右衛門は涙を流しながら手を突いて、「命は惜しうゝ」と云つた。また君臣の高い嘲弄の笑声が響き渡つた。刑部の心の裡には、右衛門の哀訴をきいて、さらに弄ばうと云ふ悪魔的な心が生じた。

刑部には最初から三浦右衛門を助ける気持ちは少しもなかった。にもかかわらず、彼は命だけは助けてやるかのやうに三浦右衛門に語りかけ、彼を虐めながら屈辱を与えてゐる。もし三浦右衛門が助命を求めずに武士らしく大胆に

死を迎えたならば、彼は切腹して一瞬で死ねたかも知れないし、少なくとも一氣に首を斬られたに違いない。彼が命乞いをしたからこそ、そして内心を打ち明けたからこそ刑部には「弄ばうと云ふ悪魔的な心が生じた」のであり、哀願する弱者を苦しめたい気分になつたのである。それゆゑ三浦右衛門は両腕と両足を次々に斬られ、苦痛と恥を感じなければならなかつた。四肢が斬られても命だけは欲しいと願つた三浦右衛門に対して「刑部の君臣はまたどつと嘲笑つて、この人間の最高にして至純たる欲求を侮辱した」のである。三浦右衛門の足を斬る場面で「太刀取は左の手で右衛門の身体を上へ持ち上げるやうにして右足を剪いだ」とあるのは、子供たちがイモリを土に投げ付け弄ぶ場面と重なる。三浦右衛門もまたイモリのように弄ばれる弱者であつたのである。

三浦右衛門は自分を寵愛する氏元を操り、贅沢で優雅な生活を送つていた。そして生き残るために主君を裏切る。切実な気持ちで助けを求め刑部を訪ねたが、刑部もまた自分の安寧のために恩人の三浦右衛門を裏切る。しかも彼が救ってくれるやうに哀願したために、それを裏切るかのやうに死を延期し苦痛を最大限に感じさせるといふ、最も残酷な方法で死においやる。これは登場人物たちの裏切りの

連鎖とも言えるだろう。この小説の冒頭で、高天神に向かう三浦右衛門はイモリ狩りをする子供たちや町人達に取り囲まれ殺される危機に陥るが、「命ばかりは助けて下され」と願い助けられる。三浦右衛門が、自分の贅沢のために苦勞していた百姓によって殺されるのではなく、第三者である、しかも自分が助けた事のある人物の刑部によって殺されるという構造は興味深い。

先行論のように、もしもこの小説がヒューマニズムを描いた小説であるという評価に相応しいとするならば、それは一所懸命に命を求める三浦右衛門という武士らしくない一人の弱い人間像を描いたからではない。それは、むしろ人間を純粹の悪としても、また純粹の善としても解釈しない、その両面を合わせ持ち、なおかつ自分の利益のためには義理などはいつでも簡単に裏切る、人間の本性を皮肉な形で掘り出したからであるといえよう。「There is also a man」とは、このような総合的な意味での「人間」つまり「man」であると読むべきなのである。

おわりに

菊池寛は最初の歴史小説を書くに当たって様々な工夫をしている。三浦右衛門という人物は、諸書の伝えとは異なる

って、歌舞伎の若衆のような美少年として設定され、講談のように、語り手の解釈やコメントが様々な形で物語に介入している。しかも歴史を舞台にしていながらも、「business as usual」「There is also a man」など英文が混じっており、「刑部は織田と今川の中間に位して居るので、欧州戦争の希臘のやうに」や「此頃の子供は義務教育などで早熟されて居ないから」などと、語りの現在がさりげなく示されている。語り手は「犬張子」を読んでこの小説を書いたとしているが、典拠である「狗張子」からは三浦右衛門のイメージや命乞いの場面だけが持ち込まれていて、歴史的な事実や背景、登場人物の名前などは全て変えられている。歴史に少しでも興味を持つている読者なら誰でも違和感を感じざるを得ない程の改作が行われたわけである。この小説が、作品の最後の語り手の発言のように、そして今まで言われて来たように、戦国時代には似合わない三浦右衛門の「人間的」な最後の場面をより効果的に書き加ったのであれば、史実通りに描き、もっと戦国時代らしい設定にするべきであるはずのだが、菊池はむしろ逆の書き方を取っているのである。

初の歴史小説を書いた菊池において、歴史とは単なる衣装に過ぎず、「テーマ」を効率よく伝えるための枠組みに過

ぎなかった。このような人間の両義性を表現するために、菊池は歴史という枠組みを用い、広く知られている歴史的な事件を転倒し、そこに知られざる裏面が隠されていた、という設定にしたのである。

結末の「man」とは、一見無実の美少年のように見える三浦右衛門の狡猾な裏面、そして恩人を裏切りグロテスクな形で殺す刑部など、卑劣で悪魔的な面までも含む存在としての「人間」を示している。菊池の初期の歴史小説には逆説的な「オチ」を描いた短編が多いが、この「三浦右衛門の最後」に、すでにその端緒を見ることが出来る。戯曲作家として出発した菊池にとって、小説を書くにあたっては「語る事」への意識的な作業が必要であり、歴史や文学作品、歌舞伎や講談など、あらゆる時代の材料をもって、これを自在に切り張りしてモザイクするように構成するという方法が採用されたのではないだろうか。それゆえ「三浦右衛門の最後」は菊池の初期の歴史小説の作法を端的に見せてくれる作品であるといえよう。

【注】

(1) 大正七年十一月には『無名作家の日記』（新進作家叢書十五「新潮社」）に収められ単行本として出版された。初出

のタイトルは「最後」ではなく「最期」であり、初刊の作品集『無名作家の日記』にも「最期」とされているが、大正十一年三月、菊池寛の最初の全集（春陽堂刊）に収録される際に「最後」と改題されている。

(2) この作品以前に発表された小説は、大正五年九月『新思潮』の「身投げ救助業」、同年十月『新思潮』の「江戸っ子」がある。

(3) 『日本古典文学大辞典』（昭和六一年、岩波書店）「狗張子」の項による。

(4) この点については、片山宏行「三浦右衛門の最後」——解説にかえて（『文芸もず』第九号、平成二十年七月）にも言及されている。片山は、「岩田準一がその『男色文献書誌』のなかで、『狗張子』中の三浦右衛門のくだり、ほか数編を挙げていることを考えると、そうした興味から菊池が本書を一瞥した可能性もある」と述べている。

(5) 妹尾薇谷『日本史蹟文庫 戦国の川中島』（大正二年、岡田文祥堂）

(6) 「カンカア」とは「cancer」つまり「癌的な存在」を意味する。

(7) 厚見老人「権八のいろいろ」『演芸画報』第三卷七号（大正五年七月）五十一項